

論文

連続する世代の中でコーダが伝えていくもの

——子育てをするコーダの語りから考える——

池田倫子

〔抄録〕

聞こえない親を持つ聞こえる子ども（**Children of deaf adults**, 以下「コーダ」とする）は親が所属するろう者の世界と、家庭の外にある聴者の世界の両方から影響を受ける特有の育ちを有する。しかし、コーダは外見からはそれと判断がつかず、コーダ同士で知り合う機会はほぼないため、自らの育ちを他者と共有することが難しく、孤独感やマイノリティ感を感じることもある。本研究は、社会で隠れた存在であるコーダの生きざまを明らかにすることを目的とし、ライフイベントの中でも自分の育ちと強い関連性がある子育てに着目した。研究手法としてライフストーリー研究を採用し、3人のコーダの語りからライフストーリーを作成・分析した。この結果より、コーダは①ヤングケアラーとして理解される存在があること②双方の世界の価値基準の間で葛藤を抱くことがあること③次世代に伝えるものは、親から受け継いだろう者の世界の事柄であることが明らかになった。

キーワード：コーダ、ろう者、子育て、手話、ライフストーリー

I. 研究の背景と目的

1. 研究の背景

コーダは、聞こえない親が所属するろう者の世界と聴者の世界の双方を経験する。家庭内では、聞こえない親の影響を強く受けるため、ろう者の世界が優先されることや、コーダが幼少期から行う通訳役割が時に親へのケアに相当する場合もあることから、コーダはいわゆる聴者の大人のロールモデルを持たないまま成長する。コーダが幼い頃は、両方の世界の存在を素直に受け止め、ひとつづきの経験として受け入れている。

しかし、コーダが成長し、聞こえない親と暮らす世界と多数派である聴者の世界を行き来

し、聴者の世界で様々な経験をすることで、自らの家庭や経験が周囲と異なることを感じるようになる。コーダは聴者であり、外見からコーダであることは判断がつかないことから、コーダの特有の育ちに気づかれることはほとんどない。また、コーダ特有の育ちや経験を周囲の人と共有することは難しいため、マイノリティ感や孤独感を感じるコーダは少なからず存在する。

さらに、コーダが成人し、就職や結婚、育児などのライフイベントを経験する中で、特有の育ちに影響されたアイデンティティや大人の聴者のロールモデルの不在などから、表面的には聴者の世界に同化しながらも、内面では周囲との違いを感じ、戸惑いや生きづらさを感じることも少なくない¹⁾。以上より、コーダが自分の育った家庭を出た後に、どのような人生を歩んでいるのかは、社会において隠れたままになっていることがわかる。

2. 研究の目的

本研究では、これまで社会から注目されてこなかったコーダの生きざまを明らかにすることを目的とする。ろう者の世界と聴者の世界の双方から影響を受ける育ちは、子ども時代のコーダのみならず、成人後のコーダにも強く影響を与える。しかし、コーダが聴者であることから、育った家庭を離れたコーダは、社会の大多数の聴者に埋もれ、コーダの人生については社会だけではなく、コーダ自身でさえも注目してこなかった²⁾。

本研究は、ライフイベントの中でも、特に自らの経験や親子関係が強く反映される子育てに焦点を当てる。また、聞こえない親、コーダ、コーダの子という連続する世代を俯瞰し、コーダとしての育ちは、聞こえない親との関係でどのように整理できるのか、また、次世代の子育てにどのように反映されるのかを考察する。

II. コーダとろう者の社会的背景

本章では、本研究の対象であるコーダと、その親であるろう者について整理を行う。特に子ども期のコーダは、一緒に暮らす親から強い影響を受ける。コーダに与える影響を考えるにあたり、親の属性であるろう者についても整理しておく必要がある。

1. コーダとは

コーダの名称は、1983年にアメリカのコーダである Millie Brother がコーダ間の関係継続を目的として発行したニュースレターの名前に由来する (Millie Brother 1996)。コーダの国際組織である CODA International によると、コーダは「聴覚障害の親を一人以上もつ聞こえる人」と定義され、親の聞こえの程度や親の手話の使用・親やコーダの手話の習熟度については問われていない (Children of Deaf Adults International n.d)。

日本には、1994年にろう者の団体であるD PRO主催のイベントで、レスリー・グリア氏(アメリカ/ろう者)によりコーダの名称と概要が初めて紹介された(中津 2020)。また、日本におけるコーダの人口統計の報告はないが、中津・廣田(2020)によれば、少なくとも22,000人のコーダの存在が推定されている。

2. ろう者とは

先述のコーダの定義によると、聴覚障害の親の聞こえの程度については言及されていないが、本研究の対象者の親は、日本手話を主なコミュニケーション手段とするろう者に限定するため、ろう者について整理を行う。

2-1. ろう者の概要

ろう者とは、『広辞苑(第六版)』によると、「耳の聞こえない人。(手話を言語とする)聴覚障害者」とされている。ろう者の人口統計は存在しないが、「平成28年生活のしづらさなどに関する調査」によると、聴覚障害の身体障害者手帳の所持者数は、65歳未満が60,000人、65歳以上は237,000人である。但し、この中には、ろう者だけではなく、難聴者、中途失聴者も含まれている。同調査で、聴覚障害者のコミュニケーション手段のうち手話や手話通訳を用いる割合は、65歳未満では25%、65歳以上では4.3%であることから、ろう者の割合は聴覚障害者の中でも少数派であることがわかる。

ろう者は従来医学モデルとして捉えられていたが、木村・市田(1995)の発表した「ろう文化宣言」で、ろう者を「日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者」とする新しい定義づけがなされている。

2-2. ろう者を取り巻く社会背景

ろう者を取り巻く背景として、(1)手話、(2)ろう文化、(3)近代の聴覚障害児教育について触れる。これらを取り上げる理由は、手話がろう者が使う言語であり、手話がろう文化と密接に関わっていること、また、近代の聴覚障害児教育がろう者の社会的困難に強い関連性があることがあげられる。

(1) 手話

「ろう文化宣言」(木村・市田 1995)にてろう者が用いるとされている日本手話について整理を行う。

松岡(2015: 9-11)は、日本では、次の3つを区別せずに「手話」とする慣行があると述べている。その3つとは、ろう者が母語として身につける日本手話と、日本語の文法通りに手話表現を並べた「純粋な」手指日本語(日本語対応手話)、両方の特徴を有する混成手話(中間手話)のことを指しており、同じろう者であっても、状況に応じて日本手話と混成手話を使い分けることがあるという。さらに、日本手話と日本語について、根本的に異なる文法的な性質を持っており、言語学的に区別されるべきものと述べている。具体的には、日本手話と日本

語の語彙の意味範囲に違いがある単語の存在³⁾や、顔や頭、肩の動きなどの非手指動作に文法的機能があること、ろう者特有の会話の運び方⁴⁾などであり、これらはろう文化と深く結びついているとされる (木村 2007)。

このように、日本手話と日本語は言語学的に別の言語であることから、本稿で用いる「手話」という用語は、原則として「日本手話」を指し、「日本語」は音声日本語及び書記日本語を指すものとする。

(2) ろう文化

手話と深い関わりがあるとされるろう文化について述べる。

原 (2016a) によれば、ろう文化とは、「聞こえない人々の限定的な『顕著な社会的集団』の事象を表す用語」をいう。ろう文化を構成する要素は、「共通の歴史、認識傾向、共通の習慣、共通の感覚、日本手話」などとされる (原 2016b)。例えば、その場にいる全員が情報を共有できるように行き先を細かく伝えること⁵⁾や、相手の目をしっかり見ること、シンプルでストレートな話し方⁶⁾などがあり、聴者の文化とは異なるふるまいがある。このようにろう者は聴者と同じ社会で暮らしていながらも、聴者とは異なる独自の文化を有している。

(3) 近代の聴覚障害児教育

ろう者を取り巻く社会的困難の背景の一つには、近代の聴覚障害児教育の影響がある。

日本の近代の聴覚障害児教育は、1878年に日本初のろう学校として、京都盲啞院が開設されたことに始まる。ここでは、手話法と筆談による教育が中心であり、発音させること (発語) や相手の話を唇の動きから読み取らせること (読話) は指導方法が未熟であったため、十分に行われないままであった。それ以降、日本各地でろう学校が設立されたが、いずれも手話や筆談による教育が中心であった (中野・伊藤・松本 2002: 140-141)。

1880年にミラノで開催された世界ろう教育者会議にて、手話法を否定し、口話法⁷⁾への決議がなされ、この決議が世界各地に影響を与えることになった。日本においても、従来の手話法を否定し、口話法の徹底がされるようになった。しかし、口話法に対応できたろう児は一部であり、多くの子どもたちは、音声での意思疎通ができず、かつ手話も否定されたことから、弊害として学力・言語力の低さや聞こえないことに対する否定的なアイデンティティの問題が生じることとなった (上農 2020)。なお、現在のろう教育の現状は、口話法を堅持している学校、口話法と手話法を併用している学校、日本手話と書記日本語のバイリンガル教育を実施している学校など多様な状況にある。

ろう学校の特徴として、戦後のろう学校の高等部には木材工芸、被服、理容、印刷などの職業訓練コースが設置され、職業教育の性格を強く有していたことがあげられる。そのため、高等部入学にあたっての選抜はごく形式的なものであり、原則として希望者全員の入学が認められていた (渡部 1994)。また、ろう学校の普通科の設置が遅れていたため、高等教育機関への進学率は聴者に比べて低い状況が続いていた。ろう者の高等教育機関への進学率が増加した

のは、1990年に、視覚障害者及び聴覚障害者であることを入学条件とする筑波技術短期大学が開設された以降のことである(坂本 2011)。

3. まとめ

コーダとは、アメリカで1983年に誕生し、日本には1994年に紹介された比較的新しい概念である。

本研究は、子育て経験のあるコーダを対象としていることから、その親であるろう者は一定の年齢以上となる。具体的には、本研究の対象のコーダの親は、ろう者の高等教育機関の進学率が増加する1990年以前の層に該当している。この層に該当するろう者は、口話法が徹底されていた時代に教育を受けており、①日本語の語彙力が十分でないこと、②手話や聞こえないことへの否定の意識があること、③聴者とは異なる教育課程の経験、④学校を卒業後の職業選択の幅が限定されていることが示された。そのため、同年代の聴者とは異なる背景を持つことが明らかになった。

III. 先行研究の検討

日本にコーダの概念が紹介されたのは、先述したように1994年である。近年、コーダ当事者によるSNSでの発信や、書籍の発行、コーダをテーマにした映画の上映などがされているが、現時点においてもコーダの社会的認知度は低い。コーダに関する研究の歴史も浅く、その数も限られている。以下に日本のコーダに関する先行研究の整理を行い、何が明らかになっているのか、残された課題は何かについて検討を行う。

1. 日本におけるコーダ研究

まず、日本におけるコーダ研究の概要を示す。現時点で発表されている日本のコーダ研究を分類すると、①コーダの文化的側面に着目したもの②ヤングケアラー的側面に着目したもの③当事者研究に大別される。

第一に、従来コーダはろう者=障害者の家族という位置付けであり、コーダそのものは等閑視されていたが、澁谷智子は日本で初めてコーダに焦点を当て、その文化的側面に着目した研究を行った。具体的には、コーダを「ろう文化」と「聴文化」の間の文化的境界者として捉えた研究(澁谷 2001)、コーダに対するフィールドワークを通して、日本語と手話のバイリンガル及び聴文化とろう文化のバイカルチュラルなコーダの側面を明らかにした研究(澁谷 2009)などがある。

第二に、ヤングケアラー的側面に着目した研究として、コーダのライフストーリー研究(澁谷 2020)やコーダの聞こえない親に対する通訳行為が親子関係に与える影響についての分

析（中津・廣田 2012. 2013. 2014. 2020）が発表されている。中津・廣田によるこれらの一連の研究からは、コーダが担う親に対する通訳役割は、幼少期からコーダに負担を感じさせ、コーダの人格形成や親子関係に影響を与えていることから、聴覚障害の親とコーダの双方に支援が必要であることが結論づけられている。

第三に、中井（2021）が中井と中国出身のコーダによる対話的エスノグラフィを用いて、コーダとしての生きづらさを外在化するために当事者研究を行っている。その結果、コーダが「見えないマイノリティ」であること、バイリンガル・バイカルチュラルなコーダとしての第三の文化を受容するためには、コーダとしての社会的アイデンティティの構築と基盤となる日本手話の継承が必要であることを指摘している。

2. 先行研究の検討と限界

以上の先行研究から、コーダがバイリンガルであり、バイカルチュラルな存在であること、コーダのヤングケアラー的側面、コーダが「見えないマイノリティ」であることが明らかになっている。しかし、コーダ研究は日本ではその歴史が浅く、大部分が未開拓である。

このような日本におけるコーダ研究の現状から、本研究ではコーダの生きざまを捉えることを目的とし、本研究の問いを次の通り設定する。それは、①ヤングケアラーとしてのコーダ②コーダとしての被養育経験が子どもへの養育態度に与える影響③聞こえない親-コーダ-子どもという三世代の中のコーダの役割、である。以下に先行研究の限界と、本研究の意義について整理を行う。

第一に、ヤングケアラーとしてのコーダの先行研究は、コーダの通訳役割に着目したものである。コーダのアイデンティティ形成において、親子がろう者集団と聴者集団という異なる集団に所属していることは少なからず影響を与えていると考えられる。このように準拠する集団という観点から、ヤングケアラーとしてのコーダを検討した研究は筆者の調べる限りにおいて見当たらず、検討の余地が残されている。

第二に、コーダやヤングケアラーは、親と過ごしていた子ども時代を経て、大人になり、自分自身の人生を生きていくことになる。ヤングケアラーとしての育ちが、その後の人生に社会的不利を与えることは示されているため（渋谷 2018）、コーダも自分自身の育ちが、大人になった後の人生に何らかの影響を与えうる可能性は十分に考えられる。しかし、日本におけるコーダの先行研究や、ヤングケアラー研究では、現段階では、子ども期を中心として捉えた研究が中心であり、コーダやヤングケアラーの「その後」に焦点を当てた研究は、ほとんど行われていない。

3. 本研究の意義

コーダの「その後」を考える際に、本研究では「世代間伝達」の視点から捉えていく。「世

代間伝達」とは、林・横山(2010)によれば、母親の幼少期における両親との間での経験が、母子の相互作用に大きな影響を与え、その特徴、性質、価値観等が子どもから孫へと伝達することと説明されている。この世代間伝達の視点より、聞こえない親とコーダの間での経験が、子どもや孫という次の世代の養育に影響を与えることは十分に考えられ、そのためにコーダが自分の育ちを肯定的に受け止める必要があると考える。さらに、従来のコーダの先行研究は聞こえない親とコーダの二世帯を対象としているが、世代間伝達の視点からは、聞こえない親とコーダのみならず、子どもの世代まで着目する必要性が考えられる。しかし、以上のような視点からの先行研究はなされておらず、検討する余地があると考えられる。よって、本研究は、コーダのライフステージの中でも、子育てをする時期に焦点を当て、特に、①コーダとしての育ちをポジティブに受け止めるための要因②三世帯の中でのコーダの役割について着目する。

以上のことを踏まえ、次章に示すコーダのライフストーリーを分析し、本研究の問いについて考察を行う。

IV. インタビュー調査

本章では、子育て経験を有するコーダを対象としたインタビュー調査の結果をもとに、それぞれのライフストーリーを作成し、考察のための分析を行う。

1. 研究方法

本研究は、コーダの生きざまを明らかにするために、ライフストーリー研究を採用する。同時に、本研究は当事者研究の側面を有していることから、それぞれについて整理を行う。

1-1. ライフストーリー研究

藤田・北村(2013: 96-97)は、ライフストーリー研究の目的を「従来のアプローチのように、人間の生を、特定の『行為』や『役割』『階層』『パーソナリティ』といった要素にばらしたり、『高齢者』『都市生活者』『被差別者』『逸脱者』などといった抽象的・集約的なカテゴリーに還元して理解するのではない。また、語られたことの『事実』性のみでとらえるのではない。むしろ、そういった要素やカテゴリーや事実をその人なりに背負いながら生きてきた、具体的な個人の経験の全体性こそを、人生という時間の流れの中で、物語性(生の経験への主体的な意味づけ)を大切にしながら理解していこうとする。そしてそこに、文化や社会をつくりかえていく人間の創造的契機を見ようとするのである」と述べている。

日本においてコーダという用語と概念は、1994年に初めて紹介された比較的新しいものである。当然のことであるが、コーダはそれ以前から存在していたが、社会的に注目されるのは聞こえない親であり、その子どもであるコーダは等閑視されていた。コーダの概念が日本に紹介され、約30年が経過しているが、現在においてもコーダの社会的認知度は未だ低いままで

ある。そのため、コーダの育ちが他の聴者と異なることは、社会の大多数の人だけでなく、コーダ当事者の多くも理解していないと推測される。したがって、コーダ研究は、「これまでの研究テーマにはなかった新しい社会問題」と捉えることができ、「何が問題なのかをめぐって当事者や少数派の声を聞く」ために、ライフストーリー研究が有用であることがわかる (桜井・小林 2005: 16)。以上のことから、本研究は、コーダのライフストーリーより、コーダ個人の経験の全体性を把握し、理解することで、コーダの生きざまを明らかにすることを目指す。

次に、語り手とインタビュアーの関係について述べる。桜井・小林 (2005: 39) によれば、ライフストーリーは「インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的な構築物」であるとしている。また、藤田・北村 (2013: 100) は、ライフストーリー研究におけるインタビュアーについて、「聴き手 (調査研究者) も無色透明な存在ではなく、自らの生と現在の立ち位置=社会的状況というポジションナリティを背負って聴いている」とし、ライフストーリー研究におけるインタビュアーの重要性について説いている。インタビュアーである筆者は現在、子育て中のコーダであり、語り手と同じ属性を有している。インタビュアーと語り手と同じ属性を有している研究手法として、「ネイティブ・エスノグラフィー」がある。ネイティブ・エスノグラフィーとは、「当該の文化のなかで生まれ育ったネイティブ自身が筆をとり、集団の内部者としての立場を踏まえて、内側からその文化について分析や考察を行なう」手法である (藤田・北村 2013: 68)。このネイティブ・エスノグラフィーの視点を参照し、本研究の語り手と同じ属性を有する筆者は、内部者としてライフストーリーを語り手とともに「共同制作」(桜井・小林 2005: 185) し、分析や考察を行う。

1-2. 当事者研究

本研究はコーダ当事者である筆者が行うものもあり、当事者研究の側面も有する。熊谷 (2020: 2-3) は当事者研究とは、苦労に直面している当事者が、その「苦労を出発点に、他者に向けてそれを表現し、先行事例を調べ、分かち合い、解釈や対処法をともに考える」一連の過程だと述べている。具体的には、見えにくい障害に見える障害に変えていくために、少数派同士が自分の体験や互いの体験の中で繰り返されたりしているパターンを発見し、それを表す新しい言葉をあてはめていくことで、「言葉のユニバーサルデザイン」(多様な特性の人にも使い勝手の良いデザインを言葉においても実践する試み) を実現することが求められるとしている (熊谷 2020: 26-27)。

これをコーダ研究にあてはめると、他の聴者との違いを感じ、生きづらさを感じているコーダたちが、その苦労を分かち合い、コーダとしての生きざまがどのようなものかを考え、コーダの解釈や対処法をともに考えていくことにその意義がある。そのためには、コーダ同士の体験を共有し、それを言語化することでコーダとは何なのかを言語化していく必要がある。本研究では、コーダ当事者である筆者が語り手のコーダたちと対話し、そのライフストーリーの意

味を言語化し、それを積み重ねていくことで、コーダの当事者研究を実現することにつながると考える。

2. 調査の概要

ここでは、調査の方法、調査対象者、倫理的配慮について整理する。

2-1. 調査の方法

インタビューは、半構造化面接法により実施した。インタビュー時期は2022年5月から6月、実施方法は1名のみ対面、2名についてはオンラインで実施している。インタビューにかけた時間は、1人当たり1時間半から2時間程度で、実施回数は2名が1回、1名が2回である。インタビューは対象者の同意を得て録音し、逐語録を作成し、分析を行った。

2-2. 調査対象者

本調査においては、子育て中あるいは子育て経験のあるコーダを対象としている。コーダの当事者団体に加入しているコーダの中で、本調査の趣旨を説明し、協力を得られた3名を対象とした。なお、本稿における調査対象者の名前は仮名である。

2-3. 倫理的配慮

本調査は、佛教大学「人を対象とする研究」倫理規程に基づき、「自己チェックシート」で点検の上、研究対象者やその他研究に関する者・団体において、不利益が生じる危険性がないことを確認した（自己チェックシート受付番号2021-20）。また、調査対象者には、調査目的やデータの取り扱いなどについては、書面の提示及び口頭で説明し、同意を得ている。調査結果の公表に際しては、個人が特定されないように配慮を行っている。

3. コーダのライフストーリー

以下に3人のコーダのライフストーリーの概要を示す。

【アイさん】 30代女性、子ども時代はろう者の両親、聴者の父方祖母と暮らしていた。祖母は手話に否定的な考えがあったため、両親はアイさんと普段手話で話していたが、祖母の前だけは声を出して話をしていたという。祖母は母に対しても否定的な態度であったため、アイさんは「聞こえる人は親のことをわかってくれない印象」を持つようになった。当事者活動に熱心であった両親は、子どものアイさんを連れて参加していたので、アイさんは「ろうの世界にどっぷり浸かる経験」をしている。当時のろう者としては珍しく大学に進学した母は、ろう者の母方祖父母よりも日本語の語彙力が高く、祖父母への筆談での通訳を担ったり、自分の進路について両親に相談することなく自分で決めるなど、ろう者であるが「コーダ」のような経験をしていた。アイさんは、母がこのような「経験(を)」しているからこそ、大変さとかも多分わかっていたと思うので、「(私に)その責任とかの押し付けもなかった」と感じている。一方で、それは「母がいるから回っ」ており、「父だけだとわからないことも多かった」とも語っ

ている。

現在2人の子を育てるアイさんは、夫がろう者であるため、「手話、ろう文化は（子どもたちに）絶対引き継がせないといけない」と考えている。アイさんは聴者であり、両親が提供してくれていたそれらを自然に理解できる環境を作ることは難しいため、子どもたちに折に触れて言葉で説明している。アイさんは、自分が「社会から背負わされたものがあつたと思うので」、子どもたちがそのような思いを持たないように「できる限り周りから解消させていきたい」と願っている。

【ユウコさん】 50代女性、子ども時代はろう者の両親、聴者の弟と暮らしていた。父は仕事を転々としていたため、ユウコさんの家は経済的に困窮していた。一方で両親はある宗教団体の熱心な信者で、家族の時間の多くは宗教活動に費やされていた。5歳まで聞こえていた父は「喋ることはでき」たが、両親ともに日本語の語彙力は低かったため、込み入った話は筆談では理解できず、手話で伝える必要があつた。そのため、手話を身につけたユウコさんは、幼い頃から両親へ手話通訳をするだけでなく、日本語の意味を説明する役割も担っていた。その後、ユウコさん自身も両親の信仰する宗教を深く信仰するようになり、単独でも宗教活動を始め、高校を卒業後もアルバイトをしながら活動を続けていた。しかし、その頃に当時高校生の弟がトラブルを起こし、両親が家庭裁判所に呼ばれる事件が起こった。両親から通訳を頼まれたユウコさんは感情を爆発させた。「私は真面目に生きていて、ちゃんとやってきてるのに、警察やら裁判所やら、…謝りに行かないといけないのか。…私は嫌だと。そこで初めて（両親に）言った。もう無理と」。自分と周囲との違いも感じていたユウコさんは、このことをきっかけに宗教活動を辞め、実家を出て、それ以降戻ることにはなかった。

ユウコさんは夫と結婚し、3人の子どもの育てる経験を通して、初めて母の子育ての大変さや母のユウコさんへの思いを理解した。ユウコさんは、自分が制約の多い子ども時代を経験したことから、自分の子どもたちには、自分で選択し、やりたいことをやれるような環境を整えることが自分の役割だと感じている。

【マキさん】 30代女性、子ども時代はろう者の両親、聴者の姉と妹と暮らしていた。マキさんは両親とは手話の単語、口を大きく動かす、身振りなどでコミュニケーションを取っていた。両親への伝わりやすさは姉妹の中で異なっており、子ども時代は姉が一番両親にうまく伝えることができていた。特に父に対しては、マキさんや妹ではうまく伝えられない時もあったため、聴者との関わりが深く、相手の意図を汲み取る力が高い母が仲介に入っていた。姉は「我が家の大黒柱」で、両親、マキさん、妹は大きな信頼を寄せていた。マキさんの人生の選択の時は、両親は相談相手にならなかったため、マキさんはいつも姉に相談をしており、両親には「全部事後報告」だという。

現在マキさんは3歳の子どもの育てている。聞こえない父がレジから呼ばれた時、マキさんの子が父に指差しで知らせている姿を見て、子ども時代の自分を重ね合わせている。両親は

子ども時代のマキさんに勉強や習い事など、マキさんの選択について強要や指示することは全くなかった。マキさんが子どもを育てる立場になり、両親のような態度をとることはとても難しいことに気がついている。聞こえない両親は情報が入りづらいために、そのような態度を取っていたのかはわからないが、いずれにしても両親がマキさんのことを信頼していたからこそその行動だったと振り返っている。マキさんは子どもの頃から両親に自分で考えるように促されてきたことから、自分の子どもにも同じように考えてほしいと考えており、「子どもに子どもの人生を歩んでほしいと日々思っている」。

4. 調査結果

本調査より明らかになったことは、①コーダが複数の集団に準拠するようになること②コーダの被養育経験がコーダの子育てに影響を与えていること③コーダが世代をつなぐ役割をしていることの3点である。この3点について、対象者の語りをもとに整理を行う。

4-1. コーダが複数の集団に準拠するようになること

ここで、コーダのライフサイクルを考える視点として、準拠集団の概念を用いる。荒牧(2019: 56)によれば、準拠集団とは、人が自らの行うべき行為や自らの境遇を判断するとき参照される集団のことをいう。この概念を用いると、幼少期のコーダは、親が所属するろう者集団に影響を受けているが、成長とともに、家庭外で過ごす機会や時間が増えていくことで、聴者の世界にも準拠するようになる。

(1) 幼少期のコーダが準拠していた集団

幼少期のコーダは、ろう者の親と過ごす時間が長く、親のコミュニティに親とともに参加するなどしていることから、ろう者集団に影響を受けている。

①親とのコミュニケーション手段

対象者の親たちは、日本語の語彙力の個人差はあるものの、手話を主なコミュニケーション手段としている。その親とコミュニケーションを取るために、コーダたちはそれぞれのやり方を体得している。アイさんは、「(両親とのコミュニケーション手段は)記憶の中では手話しかなくて」、口話や筆談、ホームサインもなかったという。ユウコさんは、「母とは手話だけ、口話を読み取る父とは口話をしながら手話」を使う一方で、ユウコさんの聞こえる弟は、「いい」「構わない」などの簡単な手話のみを使っており、兄弟のコーダであっても手段が異なっている。マキさんは、「身振りとか、口を大きくしたりとか、知っている手を動かし(手話単語を表現し)ながら」伝えていた。

このようにコーダたちにとっての手話、口話、身振りは、親に伝えるための手段として、それぞれが体得したものである。

②ろう者のふるまい

コーダはろう者と暮らしているので、視線を合わせたり、音声以外の方法で伝えるなどの聴

者とは異なるふるまいを身につけており、ユウコさんは次のように語っている。

ユウコさん「(三男が聞こえない) じいちゃんといて、知らせる時に、ライトをパチパチしたり。ちゃんと見てるんだと思って。教えなくてもするし、肩をちゃんと叩いて、前に回ってゆっくり口を大きく開けて言うから」

このようなふるまいは、ユウコさんが親との暮らしの中で身につけたものであり、それがユウコさんの三男に伝わっていることが示されている。

③ろう者コミュニティへの参加

本調査のコーダたちは、幼少期に親が関わるろう者コミュニティに親とともに参加している。関わりりの深さはそれぞれによって異なるが、アイさんは「ろうの世界にどっぷり浸かる経験」をしていたと感じており、その経験をアイさんは次のように語っている。

アイさん「(手話で子育てをする母の方針を) 改めて説明されるというのではなく、いろんなところに連れていかれる中で、その方法(手話)でしか伝わらないことをすごく知ったし。(ろう重複障害の) 人と交流する機会もある中で、聞こえない人の中にもいろんな人がいることも知れたし。(両親は) そういうところ⁸⁾に連れて行くとか、見させてあげる、経験させることで、(ろう者の世界のことを私に) ある意味語ってくれていたんだなと思うんです。説明してくれていたんだなと」

コーダたちは、ろう者コミュニティに参加することで、親以外のろう者の存在を経験的に把握していることがわかる。それだけではなく、ろう者が多様であること、ろう者には手話が必要であることを経験的に感じていたコーダもいることが示されている。

(2) ろう者集団から聴者の世界へ

コーダたちは、幼少期はろう者集団から影響を受けているが、ライフサイクルの進行に伴い、聴者の世界からも影響を受けるようになる。

①聴者のコミュニケーション手段

本調査のコーダたちは、家の外的世界である保育園、幼稚園、学校などで日本語を学び、聞こえない親よりも日本語の語彙力を身につけるようになる。

ユウコさんは、学校の勉強を両親に教えてもらったことがないと語っている。ユウコさんの両親は、日本語の語彙力が十分ではないことを自認していたため、ユウコさんの日本語の遅れを心配し、小学校の先生に次のようなお願いをしていた。

ユウコさん「(両親は) 学校の先生に『自分たちは文章が苦手だから(ユウコさんが) 文章を書けるようにしてほしい』と言って、…先生との話し合いでそうなったのか、ちょっとわからないんだけど。…(私が) その日の絵日記を書くんだけれど、毎日先生に添削してもらう。…必ず担任の先生に、それは母がいつもお願いをして、この絵日記の添削をお願いしますと。自分は文章がわからないから、先生たちが直してくれていて、それで言葉を教えてやってほしいみたいな感じで、絵日記を。…(小学校の) 6年間ずっとやりましたね」

ユウコさんが家の中では身につけづらい日本語を家の外で学んだように、コーダたちは家の外の世界で日本語の語彙力を身につけていた。

②親と重ならない経験

本調査のコーダたちは、自分自身の経験が親と重ならないことを感じている。

アイさんは、「進路のことなんかも、…（私が説明する場に両親が）二人ともいるんですけど、説明したことを母の方が理解しているので、後で母が父に話すという感じのことが多かったと思うので。父は母に任せているという感じ」と語り、社会経験が豊かな母には自分の進路のことは相談できていたが、父には伝わらなかったことを経験している。マキさんは、自分の進路のことなどは親に相談せず、聴者である姉に相談して決めている。マキさんは自分の経験が親の経験と重ならないことを理解しているので、自分と同じような進路を選択している姉に助言を求め、それに従って進路選択をしていることがわかる。

③自分の経験・人生の選択を親に説明できない

本調査のコーダたちは、それぞれのやり方で親とコミュニケーションを取っているが、それは日常生活の範囲内に留まるものである。自分が経験している聴者の世界のことを親に伝えるまでの技術は獲得できていない。

マキさんは自分の進路や留学について、親に相談や説明することなく決断し、親には「全部事後報告」と語っている。それは、親とマキさんの経験が重ならないことが理由の一つであるが、それだけではなく、伝える手段としての手話の技術が身につけていなかったことが考えられる。

④小括

幼少期のコーダは親の所属するろう者集団から影響を受けているが、家の外で日本語を学び、聴者の世界で経験を重ねていくことで、聴者の世界から影響を受けるようになる。その結果、ろう者集団と聴者の世界の双方の価値基準を有するようになる。また、コーダの聴者の世界での経験は親の経験と重ならない部分が多く、さらに親に対して自分の経験を説明できるほどのコミュニケーション手段を持っていないことも明らかになった。

4-2. コーダの被養育経験がコーダの子育てに影響を与えていること

本調査から、コーダの被養育経験は、コーダの養育態度に影響を与えていることが示されている。

アイさん「(子どもたちは)これから(コーダとして生きていくうちに)生きづらさが出てくるだろうと、いくら環境が変わってもゼロにはならないと思うので。…(だから)自分がどういう人なのかしっかり気付きながら成長して行って欲しいなと。もし嫌な気持ちになったら、そういう時はどうしたらいいのか、考える力を持って欲しいなと思って」

マキさん「(親から)『自分で考えなさい』ってすごく言われました。子どもにも私、『自分で考えて』って言っていますね。…『自分でこっちやるって決めたなら、泣かずに最後までや

りなさいよ』みたいな感じで。厳しいって言われました。(子どもが) ちっちゃい時、物心つくかつかない頃から、もう喋り始めた時ぐらいから、私はこういう感じだったので」

これらのコーダの語りからは、コーダである自分が親に頼ることなく人生の選択を決めてこなければならなかった経験を、他に手段がなかったという否定的なものではなく、肯定的に受け止め、自分の子どもたちにも自分で選択させていきたいとの姿勢を取っていることがわかる。

以上より、コーダはその成長過程で、ろう者の集団と聴者の世界の双方の価値基準を有するようになる。双方の価値基準は統合され、それをもとにコーダは子育てを行っていることが示されている。

4-3. コーダが世代をつなぐ役割をしていること

ここで、聞こえない親を「第一世代」、コーダを「第二世代」、コーダの子を「第三世代」とする。

本調査のコーダたちは、「第一世代」と「第三世代」をつなぐ役割をしている。

ユウコさんは、親と話すときは、手話や口話付きの手話を使っているが、子どもたちが一緒にいるときは、声を出しながら手話をしていたという。それは、ユウコさんが親と話している内容を「子どもたちにも情報共有しなきゃという気持ち」があったからという。また、三男を手話の講習会に連れていき、そのことが結果として三男が手話やろう者について触れる機会になっている。

アイさんは、コーダである子どもたちに対して、親が与えてくれたような環境を作っていきたいと考えている。アイさんの親はその環境を説明することなく自然に与えてくれていたが、アイさんは、「(聞こえる) 私がいることで声で喋っても大丈夫な環境になってしまうので」、「できる限り自然にさせてあげたい」と葛藤しながらも、ろう者や手話のことを「(子どもたちに) 大切にしないといけないことを…強要してしまうに近いかもしれません」と語っている。

河崎 (2004: 86) は、手話が否定されていた時代に育ったろう者は、親子の関係を発展させる「ことば」が奪われた結果、ろう者の被養育体験が、聴者の親の真の気持ちとは別に「愛情に欠けた、希薄な関わり」になってしまったと指摘している。一方、本調査のコーダたちは、ろう者について、親からあえて説明されるのではなく、親が所属するろう者集団に影響を受け、体験的に学び、それぞれのコミュニケーション手段を使って、親子関係を築いている。

このように築き上げた親子関係を前提に、コーダは「第三世代」に対して「第一世代」のことを伝える働きかけをしている。聴者の祖父母と「希薄な関わり」であった「第一世代」が、コーダに祖父母についてどのように伝えるかが難しいことと対照的である。

コーダの「第一世代」と「第三世代」をつなぐ働きかけにより、「第三世代」が「第一世代」を理解することにつながり、両者の関係を深めることにつながっている。以上のことから、コーダは世代をつなぐ役割を担っていることがわかる。

V. 結 論

調査の結果を踏まえ、コーダの生きざまを捉えるために、①ヤングケアラーとしてのコーダ②コーダとしての育ちをポジティブに受け止めるための要因③三世代の中のコーダの役割について検討する。

1. ヤングケアラーとしてのコーダ

コーダの中には、幼少期から親をケアする役割を担い、そのケアが過度な負担になっている人もいることから、ヤングケアラーに該当する人が存在する。ユウコさんは、幼少期から親への通訳を担ったり、日本語の意味を説明するなどのケアを行なっている。これらの行為に心理的負担を感じている場面があることから、ヤングケアラーとしての側面があることがわかる。

次に、ヤングケアラーとしてコーダに特徴的な事柄について考察する。

本調査で、コーダのライフサイクルの進行に伴い、コーダがろう者集団と聴者の世界の双方に準拠することが示されている。もっとも、社会では聴者が大多数を占めていることから、親が所属するろう者集団は少数派であり、社会における影響力も弱い。聴者の世界からの影響は、コーダが聴者であることから成長とともに必然的に生じる。子どもは発達過程にあり、社会的に未熟な存在であることから、聴者の世界で過ごす時間が長くなるにつれ、多くのコーダは無自覚なまま、社会の多数派である聴者の世界の価値基準を身につけることになる。そのため、両者の価値基準の違いからケアの対象となる親に対して「言ってもわからない」などといった否定的な気持ちや、諦めの気持ちを抱くことにつながる。また、コーダ自身が双方の集団の違いに戸惑いを感じたり、孤独感や親に対する葛藤などを抱いたとしても、外見は単なる聴者であるため、コーダ同士で知り合う機会は乏しく、先述したような自分の気持ちを他者と共有することは難しい。

以上述べたように、コーダは成長とともに、ろう者集団と聴者の世界の双方に準拠するようになり、二つの価値基準を有するようになる。もっとも、聞こえない親が所属する集団の価値基準は社会において少数派であるため、時にコーダは二つの価値観に挟まれ、葛藤する経験をする。さらに、その葛藤は他者だけでなく、親とも共有は難しく、コーダは孤独を抱えることになる。ここに、ヤングケアラーとしてのコーダの複雑さがある。

2. コーダとしての育ちをポジティブに受け止めるための要因

コーダが大人になり、自分の子どもを育てる立場になったとき、養育態度にコーダとしての育ちが影響を与えることは、世代間伝達の視点から十分に考えられる。特に、ヤングケアラーの経験があるコーダにはネガティブな影響があることが推測される。よって、安定した子育て

ができるかどうかは、コーダが被養育経験をどのように捉えているかが影響を与える。

本調査のコーダは、自分が育てられたように自分の子どもたちに接しており、コーダとしての育ちをポジティブに受け止めていると考えられる。ここで、コーダが育てる立場になったときに、自分の育ちをポジティブに受け止めることを可能にした要因について、本調査より考察する。

第一に、子ども期に支えになった人の存在が考えられる。例えば、アイさんであれば、自宅に頻繁に来てくれていた手話が堪能な大叔母さん、マキさんであれば姉と妹である。コーダにとって、それらの人は、コーダであることを受け止めてくれる存在であったり、自分の気持ちを共有できる存在であった。第二に、コーダがろう者の世界を体験的に理解していたことである。本調査の親たちは、それぞれのろう者コミュニティとつながっており、子ども時代のコーダたちは、親とともにその集団で過ごしている。この経験が、コーダのろう者に対する理解を深め、親をろう者の中の一人として理解することにつながっている。第三に、コーダが自分の人生経験を通して、自分の育ちを再構築することが考えられる。例えば、ユウコさんは、「(自分が)子育てをして、(母の)子育ての大変さを…共感したっていう感じ」と語っており、自分の子育て経験が自分の育ちを受容する一翼を担っていると考えられる。いずれの要因も、親子間で愛情関係が形成されているという自覚が前提にある。

村上（2022）は、ヤングケアラーの語りの分析で、親からの愛情を子が感じていたことと、子に居場所があったことが子の成長の支えになっており、「そのうえで大人になってから振り返って向き合う機会を手にしたときに、困難な過去は意味を更新されて自分自身を肯定するものになる」と述べている。コーダに当てはめて考察すると、親子感での愛情関係が前提にあり、子ども期に支えてくれた人の存在と、ろう者の世界の理解、自分の人生経験により、コーダとしての育ちを肯定的に受け止めることができると考える。

本調査のコーダたちが、自分の子どもに自分で選択させたいという姿勢をとっているのは、コーダとしての育ちを肯定的に受容し、子ども時代の自分が選択してきたことを肯定的に受け止めているからである。

3. 三世代の中のコーダの役割

澁谷（2009）によると、コーダは聞こえない親と聞こえる人をつなぐ役割を担っている。子ども期のコーダは、主体的ではなく、周囲の大人の意向や、社会からの要請でそれを行うことが多い。一方で、本調査のコーダたちは、自らの意思で「第一世代」（聞こえない親）と「第三世代」（コーダの子）をつないでいる。それは、コーダ自身が聞こえない親を含むろう者への理解があることと、コーダとしての育ちを肯定的に受容しているからである。さらに、聞こえない親や手話について、コーダが「第三世代」に言葉で説明することで、両者の関係を深め、ろう者や手話についての世代間伝達がなされているのである。

4. まとめ

コードの中には、ヤングケアラーとして理解される存在がある。他のヤングケアラーに見られない特徴的な事柄は、コードが有する聴者の価値基準とろう者の価値基準の双方の間で葛藤を抱くことや、その葛藤を他者に共有することが難しい点にある。

コードは聞こえない親から聴者の振る舞いや価値基準を受け継ぐことは、おおよそ難しい。それらは、聞こえない親以外から獲得するものである。コードが受け継ぐことができるのは、ろう者や手話など聞こえない人を取り巻く世界の事柄である。さらに、コードが子どもを育てる立場になったときに、その世界について子らに伝えていく役割を担うことになる。ただし、伝えていくためには、コード自身が自分の育ちを肯定的に受け止めることが前提となり、そのためには、コードを支える人の存在や、ろう者の世界に対する理解、コードの人生経験などが必要となる。

5. 本研究の限界

本調査の対象者は当事者団体に所属しており、ろう者やコードに一定の関心を持っていることが想定される。また、大人になってから、家族以外のろう者に関わる経験を有しており、対象に偏りがあるとの批判は免れない。しかし、社会におけるコード像が不明確な現段階においては、コードとしての育ちを肯定的に受け止め、子どもたちにそれを伝えている例として研究の有意性があると言える。今後、コードやろう者、手話に関心を持たないコードに対象を広げ、コードのライフステージについての研究を深めていきたいと考える。

また、本調査のコードの親は、教育制度などろう者が社会的に不利な状況にあった世代であり、コードは親の社会的不利の躰寄せを受け止めている側面もある。1990年以降から現在にかけて、多くのろう者が高等教育機関に進学するなど、社会におけるろう者の状況は変化しており、今後コードが家庭内で負担するケアが軽くなることも想定される。この世代の「背負わないコード」たちの生きざまについても、今後のコード研究の課題となるであろう。

〔注〕

- 1) 澁谷 (2009: 209-210) は、コードは自分のライフイベントを経験する中で、自分の育ちについて見つめ直す契機があっても、自分の経験と周囲の人の経験があまりに異なることから、「結局コードは、他人の話に自分の体験を照らし合わせてその意味を確認する機会を持たないまま、一人がんばって試行錯誤することになりやすい。」と述べている。
- 2) 澁谷 (2009: 206) は、この点について「ろう者や手話に関わらない生活をしているコードの大半は、「コード」という言葉も知らず、そこに共有する体験や独特の文化があるという意識も持たないまま、自分と親との個人的な関係を生きている。」と述べている。
- 3) 例えば、手話単語の〈かまわない〉は、日本語の「かまいません」「結構です」という意味だけでなく、他に誘いに応じる場面で「喜んで」という意味でも用いる。このように、日本手話と日本語は異なる語彙体系を有している (木村 2007: 108-110)。

連続する世代の中でコーダが伝えていくもの (池田倫子)

- 4) 例えば、ろう者の会話では、イエス・ノー疑問文に対して、イエス・ノーだけで答え、相手の反応を見てから発話を続けるかどうか決める。聴者の会話では、イエス・ノーで答えると、その質問に対して不快を持っている、答えたくないということにつながる場合もある (木村 2007: 43-47)。
- 5) 例えば、聴者間では一般的にはトイレに行く場合は行き先を伝えることはないが、ろう者の場合は、その場にいる人に情報共有をするために行き先を伝えることがある (澁谷 2009: 29-42)。
- 6) 例えば、聴者間では、一般的には「太った？」など外見に対することや年齢については、親密な関係でなければ尋ねることができないが、ろう者の場合はそれほど親密な関係でなくても尋ねることはよくある (木村 2007: 142-143)。
- 7) 発語 (音を発音すること) と読話 (相手の話を唇の動きから読み取ること) を指す。
- 8) ろう者コミュニティを指す。

【参考文献】

- 荒牧草平 (2019) 『教育格差のかくれた背景 親のパーソナルネットワークと学歴志向』勁草書房
- Children of Deaf Adults International (n.d), ABOUT CODA, <https://www.coda-international.org/about> (参照 2022. 11. 3)
- 原順子 (2016a) 「聴覚障害ソーシャルワークにおけるろう文化視点と文化モデルアプローチの有効性に関する考察」『四天王寺大学大学院研究論集』11, 39-51
- 原順子 (2016b) 「聴覚障害者への相談支援における文化モデルアプローチの一考察 - 具体例から考察する文化モデル視点への転換 -」『四天王寺大学紀要』62, 265-276
- 林裕美・横山恭子 (2010) 「ネガティブな被養育経験を持ちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について：負の世代間伝達を断ち切るために」『上智大学心理学年報』34, 33-42
- 藤田結子・北村文 (2013) 『現代エスノグラフィー 新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社
- 河崎佳子 (2004) 『きこえない子の心・ことば・家族-聴覚障害者カウンセリングの現場から』明石書店
- 木村晴美 (2007) 『日本手話とろう文化 ろう者はストレンジャー』生活書院
- 木村晴美・市田泰弘 (1995) 「ろう文化宣言 言語的少数者としてのろう者」『現代思想』23(3), 354-362
- 厚生労働省 (2018) 『平成 28 年生活のしづらさなどに関する調査 (全国在宅障害児・者等実態調査)』厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課
- 熊谷晋一郎 (2020) 『当事者研究-等身大の〈わたし〉の発見と回復』岩波書店
- 松岡和美 (2015) 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』くろしお出版
- Millie Brother/米内山明宏・市田泰弘・本橋哲也訳 (1996) 「CODA とは何か」『現代思想』24(5), 366-370
- 村上靖彦 (2022) 『「ヤングケアラー」とは誰か 家族を“気づかう”子どもたちの孤立』朝日新聞出版
- 中井好男 (2021) 「私はコーダとして日本手話を継承すべきだったのか 中国出身のコーダとの対話的自己エスノグラフィー」『言語文化教育研究』19, 52-73
- 中野善達・伊藤雋祐・松本晶行 (2002) 『手でおしゃべり 手話への招待』福村出版
- 中津真美 (2020) 「聴覚障害の親をもつ聞こえる子どもの自助グループにおける取り組み」『社会福祉研究』138, 77-85
- 中津真美・廣田栄子 (2012) 「聴覚障害の親をもつ健聴の子ども (CODA) の通訳役割に関する親子の認識と変容」『音声言語医学』53, 219-228
- 中津真美・廣田栄子 (2013) 「聴覚障害の親をもつ健聴の子ども (CODA) の通訳場面に抱く心理状態と変容」『Audiology Japan』56, 249-257

- 中津真美・廣田栄子 (2014) 「聴覚障害の親をもつ健聴の子ども (CODA) における親からの心理的自立時期の長期化の要因」『音声言語医学』55, 130-136
- 中津真美・廣田栄子 (2020) 「聴覚障害の親を持つ健聴児 (Children of Deaf Adults: CODA) の通訳役割の実態と関連する要因の検討」『Audiology Japan』63, 69-77
- 坂本徳仁 (2011) 「聴覚障害者の進学と就労－現状と課題」『生存学研究センター報告』16, 14-30
- 桜井厚・小林多寿子 (2005) 『ライズストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房
- 澁谷智子 (2001) 「文化的境界者としてのコーダ -「ろう文化」と「聴文化」の間-」『比較文学』44, 69-81
- 澁谷智子 (2009) 『コーダの世界 手話の文化と声の文化』医学書院
- 澁谷智子 (2018) 『ヤングケアラー - 介護を担う子ども・若者の現実』中央公論新社
- 澁谷智子 (2020) 『ヤングケアラー - わたしの語り - 子どもや若者が経験した家族のケア・介護』生活書院
- 新村出編 (2008) 『広辞苑 (第六版)』岩波書店
- 上農正剛 (2020) 「聾教育における手話と書記日本語の問題 現実の中で議論するために」『手話学研究』29(2), 74-93
- 渡部昭男 (1994) 「盲・聾学校における高等部の入学者選抜制度」『鳥取大学教育学部研究報告 教育科学』36(2), 351-380

(いけだ のりこ 社会福祉学研究科社会福祉学専攻修士課程／修了)

(指導教員：田中 智子 教授)

2023年9月24日受理